

「UTM exchange study program」

訪問日時：8月22日

移動手段：貸切バス

訪問場所：UTM (University Technology Malaysia)

マレーシアではクアラルンプールに次ぐ都市であるジョホールバル。UTMはそこに広大なキャンパスを有する公立の工科大学である。マレーシアは多民族国家であり、UTMにもマレー系や中国系など多様な学生が通っている。今回の訪問では、UTMの学生と先生約20人と交流し、互いにプレゼンテーションをしあったり、日本の文化を紹介したり、昼食を御馳走になったりし、充実した時間を過ごした。

プレゼンテーションは、立命館からは橋本教授、UTMからは学部生や先生など3名の方が発表をされた。橋本教授はよく東南アジア人に似ていると言われることから、「前世は東南アジア人だったかもしれません」とのジョークで会場を盛り上げた後、立命館の概要についてお話された。UTMの方は、UTMの概要やご専門されている湿地について、また気候変動についてについてわかりやすく丁寧な英語で説明して下さった。湿地についてのプレゼンテーションでは、湿地の種類や課題など著者達は全く知らない少々専門的な話をされた。しかし、英語を普段使わない著者たちにも理解できるように噛み砕いて簡単な英語で説明していただいた。自分の研究内容を外国人に話すということは、本当に研究者自身が研究内容を理解していないとできないことであろう。自分自身の研究の理解を深めるという点で、外国人に研究発表をするということは有意義なことであるということを肌で感じられた貴重な時間となった。



(立命館の概要を英語にてプレゼンテーションされる橋本教授)

プレゼンテーションが終わった後、日本から持参した折り紙・けん玉・だるま落としを日本の文化としてUTM学生に紹介した。UTM学生は折り紙で鶴が折れることに驚き、一緒に折ってみようとする、「この後はどうやって折るの？教えて！」と興味津々であった。ここで感じたのは、UTM学生の異文化交流に対する姿勢が素晴らしいということである。鶴1つ折るのでさえ耳を傾けて聴いてくれ、折り終ると童心に返ったように凄いとしゃぐ。お世辞にも言語が完璧に通じるとは言えない状況で、そのように「楽しい」と思ってくれている態度を示してくれたことで、著者たちは非常に安心できた。今後別の国と異文化交流をするうえで、著者たちはUTM学生のような態度をひとつの目標としても良いのかもしれない。ただ異文化交流をするだけではなく、このようにUTM学生の態度からも得るものがあった。

日本の文化紹介の後、UTM近くのイオンにて、UTMに昼食を御馳走になった。メニューはチキンライスとチキン、ポテトなどで、日本人学生からはマレーシアで一番おいしいご飯であったと専らの評判であった。1テーブル4人の席にUTM学生と立命館学生が混合して座り、互いの文化の話や専攻の話等をした。著者のテーブルでは、マレーシアで問題となっている大気汚染現象ヘイズについてどう思っているか、またムスリムの服装などについてUTM学生に質問した。ヘイズは学生全員知っており、かつ不安に感じ、マスクなど自己防衛をしているようだった。また、「ムスリム女性の服装は暑くないのか」という素朴な質問には、UTM学生は「小さいころから着ているから特に何も感じない」と笑って答えてくれた。このような会話を昼食を食べながら英語で行ったが、中学英語でも意外に通じるということが著者たちのなかで話題に上った。問題はその中学英語がすぐにでてこないことである。今後は簡単な英語でもいいから、すぐに文を組み立てられるような練習が必要だと感じた。

今回のUTM学生との異文化交流では、専攻での情報共有や文化交流をすることができ、非常に充実した時間を過ごすことができた。次に異文化交流をする機会で生かせるように、今回の交流で得た学びや課題を日々の生活で昇華されたい。



(UTM学生との昼食の様子)